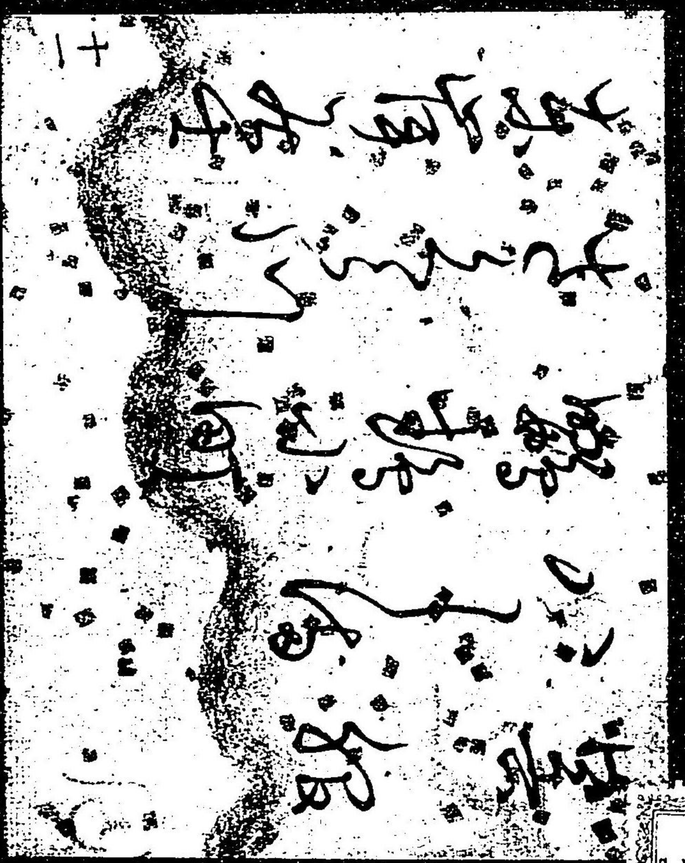
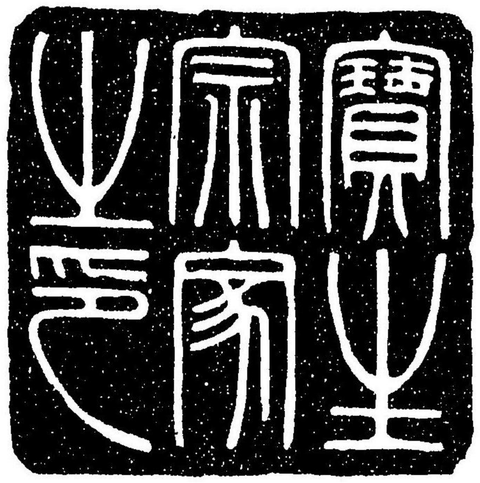


2419



呉服

次第

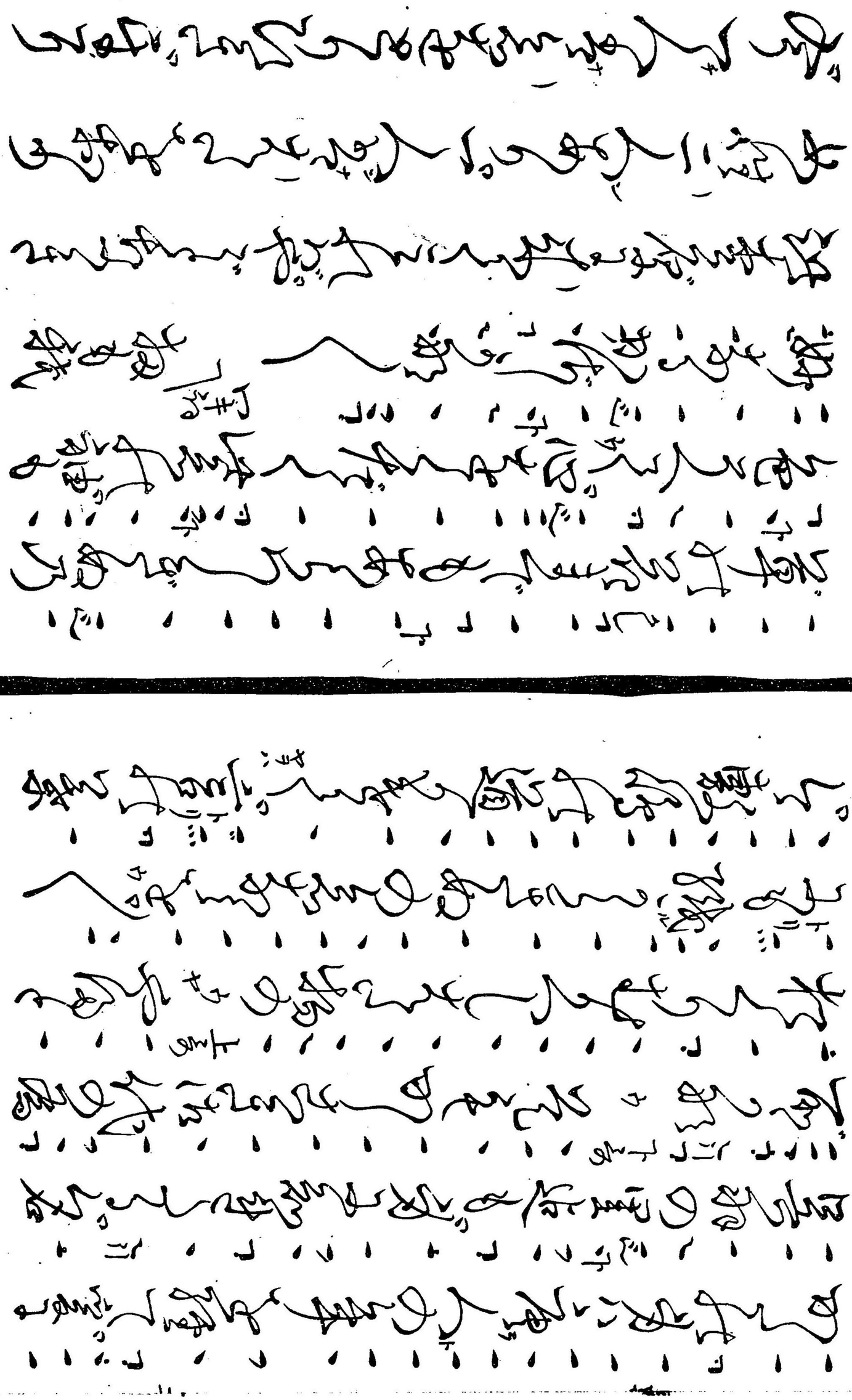
道ある御代の時なれや〳〵國もゆるがぬ恵みかな

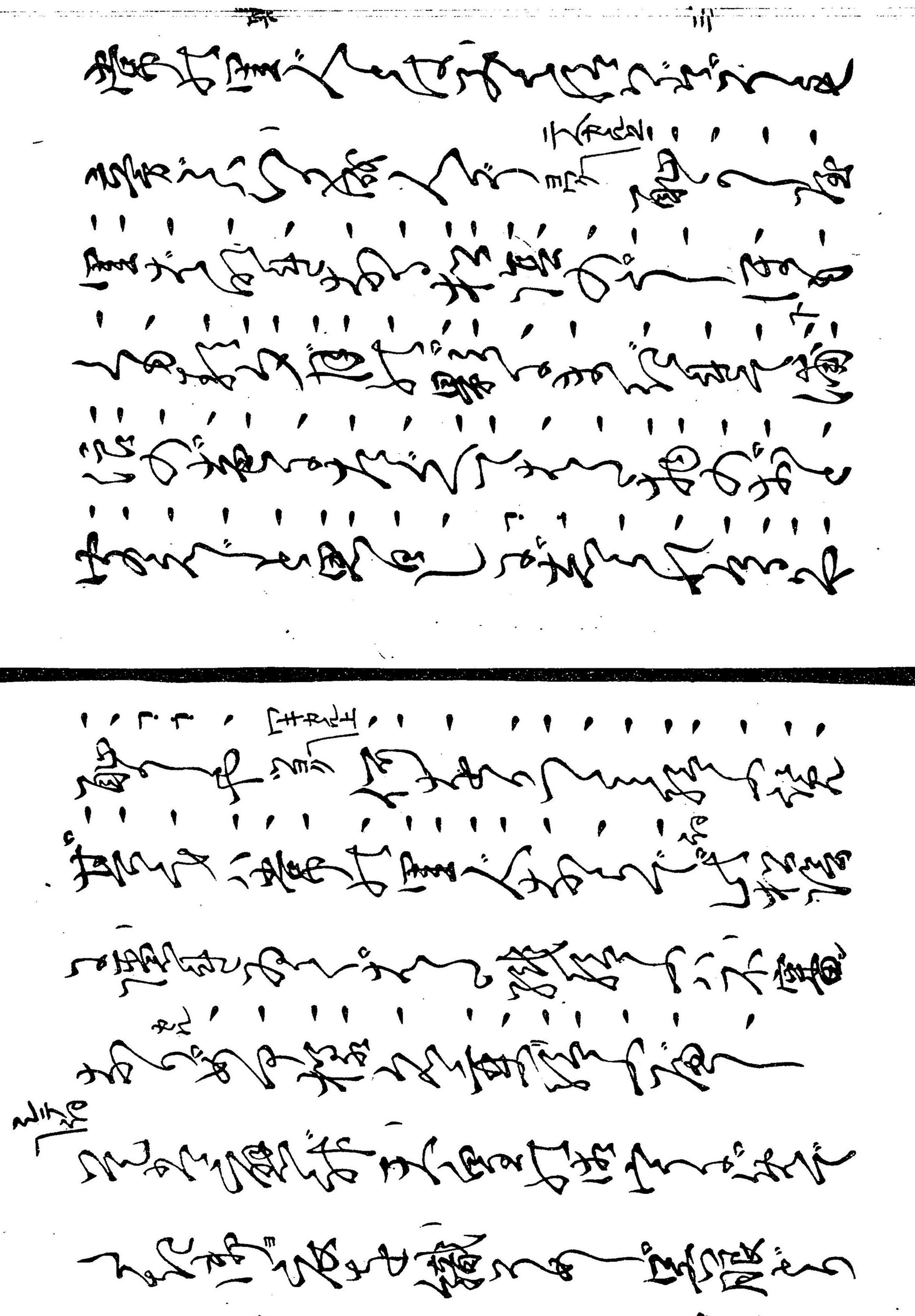
詞 抑是は當今に仕へ奉る臣下也我此間は摂州住吉に参詣申て候又是より浦傳ひ西の宮に参らばやと存候

明治 44. 6. 3 内交

住江や長閑き浪のあけぼのく
玉藻のあやある海士人の道も直
なる難波の浦も名を
ゆるゝ津國の里に名高く
「早服より猿乃夜汁浦里にや
路くまで海士の衆め 「立よる

浪も志らゝ名乃ゞるのありうつるおもと
志ぎ 「旦八峰の國にれ生乃
里にあそみくらえし初二人の若ざまれ
路きに有あざらえむ唐の名ほし
おゝ女王のむゝしを思ひ出づ月毎
りさや西乃海ばる路すゝむのふまう





あやハどりと申すハ二人の者にて
まへめぐくたまれ代あれバ取くる私
ハ手斗り取りかへり　ふつゞけて
ちる事あり・かやうのハ首の男が代る
唐国よりこそ渡されて渡れする
二人の人がするものにて現在はあく

手孫よハ何といふる事や覧
すくも他ね孫つ取つあがせん民里を
思羽のさうじんばらめも何あ
ご我迷寄はすし故あり　文
あやハどりとはたそのがたより
むかしハたくみゆるばやけ孫をも

なに故にあやはどりなどは申や
シテ「呉服どりとはくれはのぶんく
本たまざくまいといへぐ呉羽とる
てまよりつくれかなどりとは申
なり
「されはみつけるによ
「きよく
「くまかなどり
「あやと

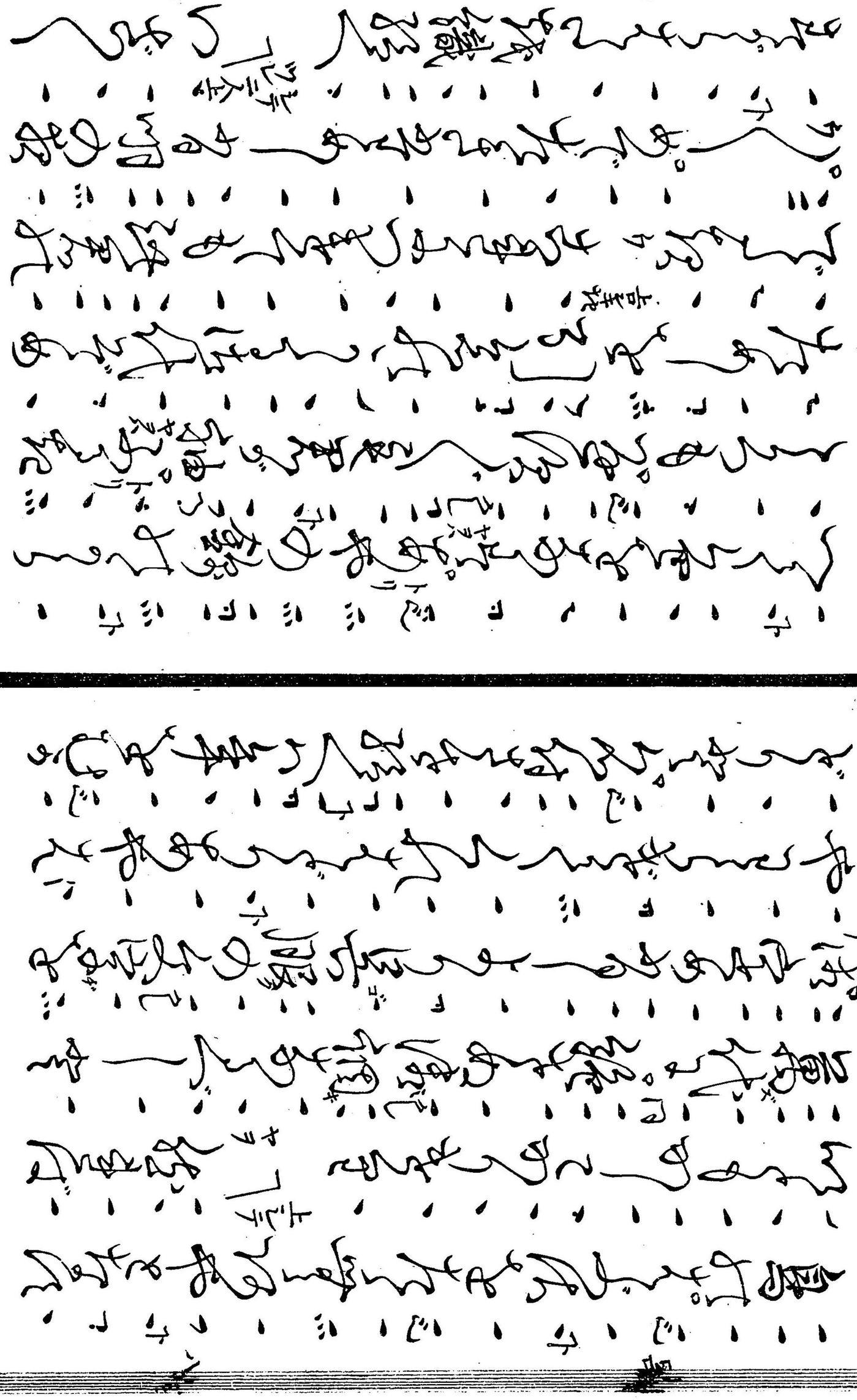
ハ申つくなり然るに我こそ
唐人なればやゆゑあつきこゝね
がまる
シテ「くれそどりあやはに
しくかゝかつ山とえきし
いまもふつりを思ひとるなり
呉羽どりあやし給ふたび

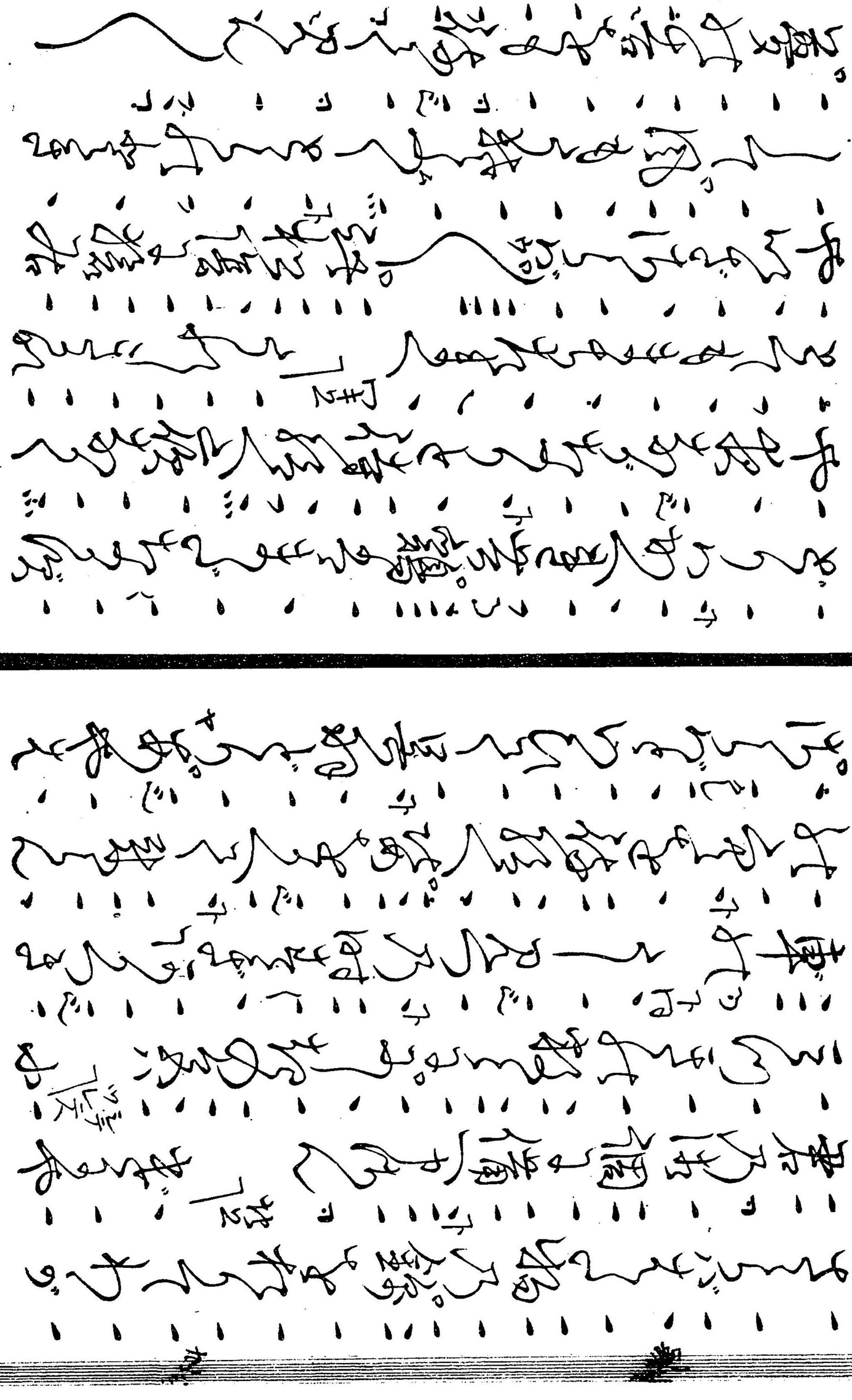
人のふくは目にうつりてみゆる
ものなれば人の身のかざり唐人
と我らとはへだてなくかはらぬから
しるやうなきまゝにうつりけんかつ
ぬひものなく呉服と云は
唐呉郡の村より織きたる女工

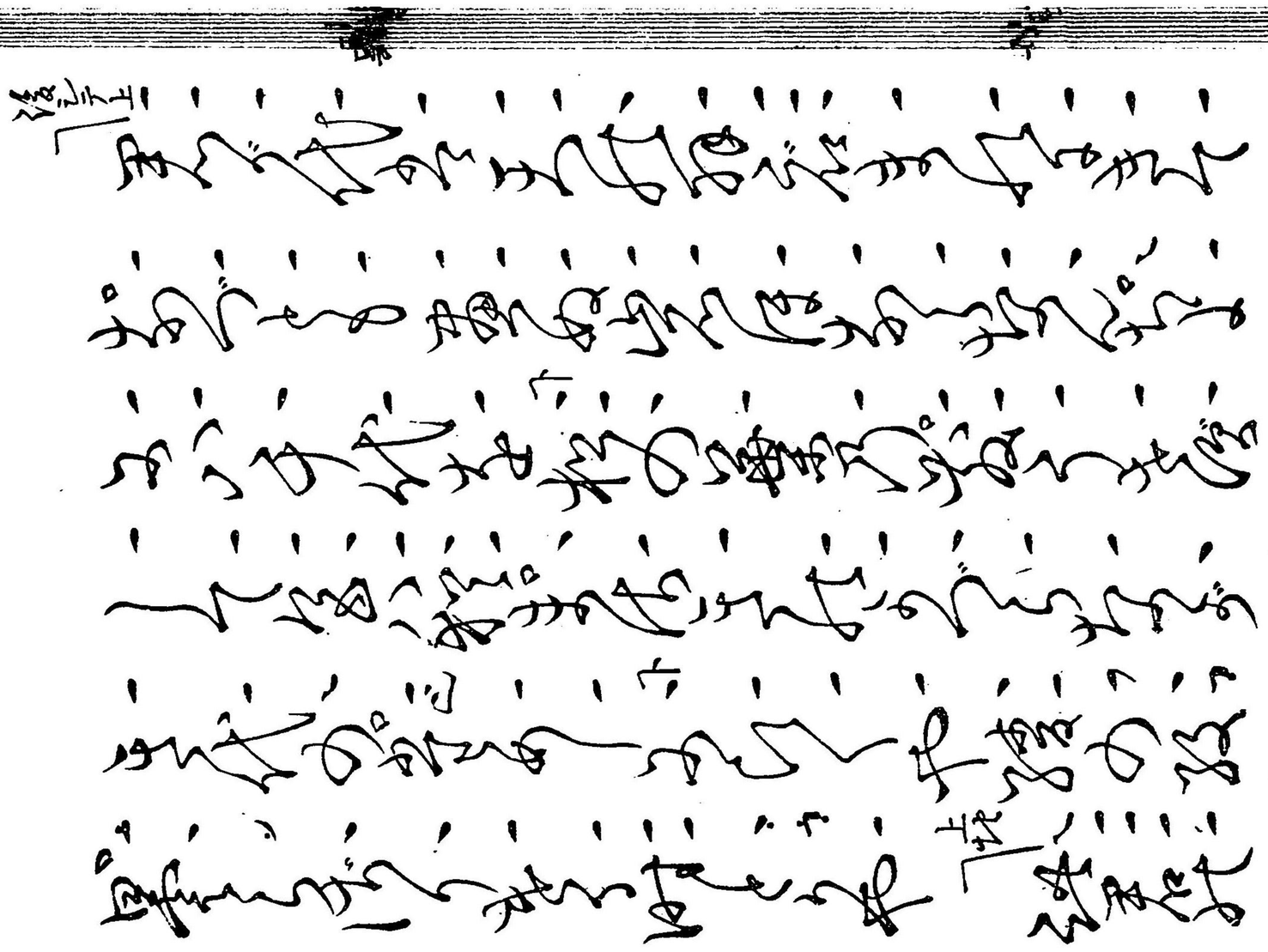
のちまちまいつとなく絶えにし
神功皇后三韓をせめしたがへ給ひし
より和国異朝の道ひらけて其の
国までもかよひ我日の本も長栄
ちよろづ代の光かゞやきて国
富民ゆたかなり

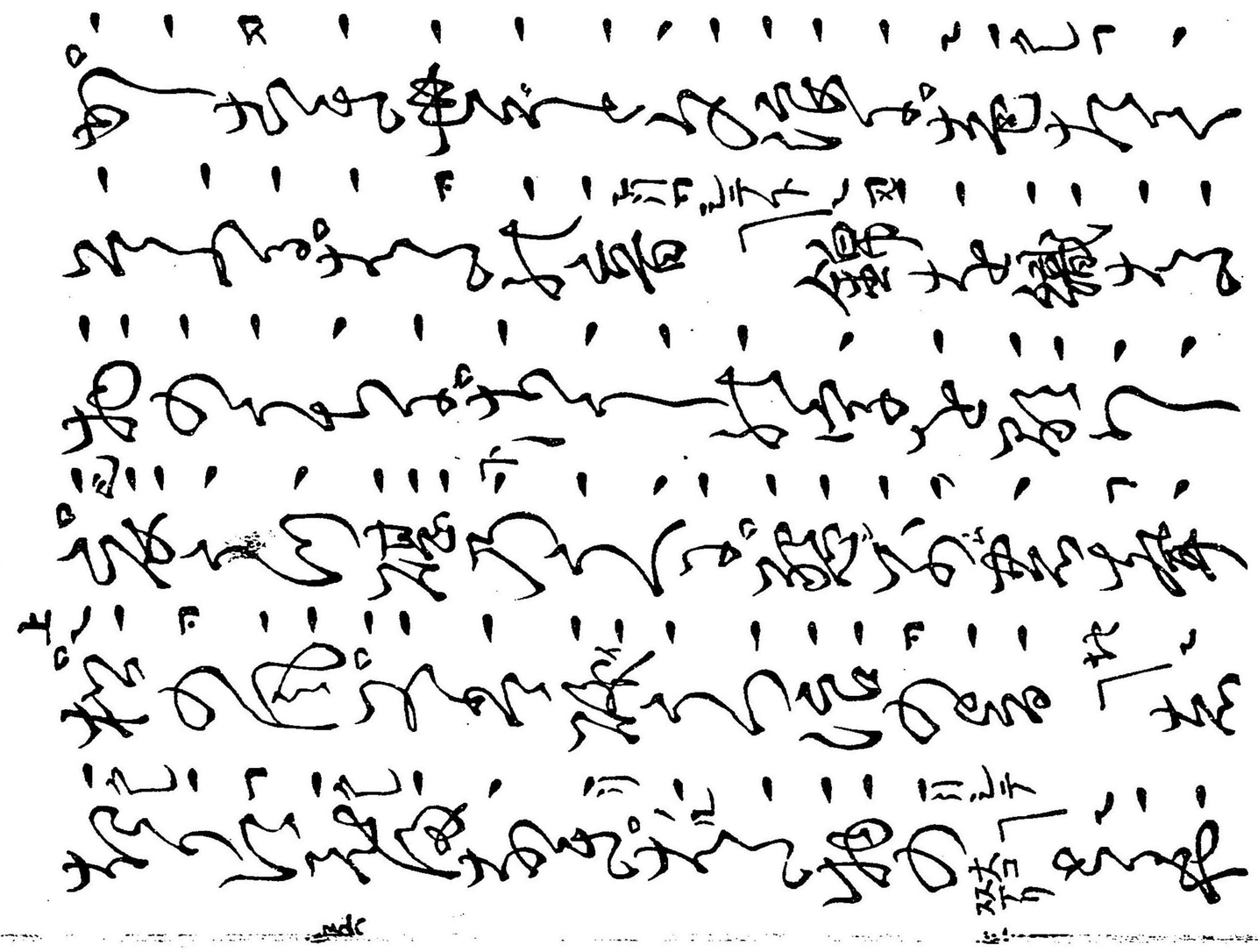
東南雲

治まりて西北より風靜まり應
神天皇社宮かたより宮國に勅使
迎國より宮へ社より船あり
めつとめ社如婦きさき萬里乃
濱波を渡る西日影船り
まく宮殿の里より連日









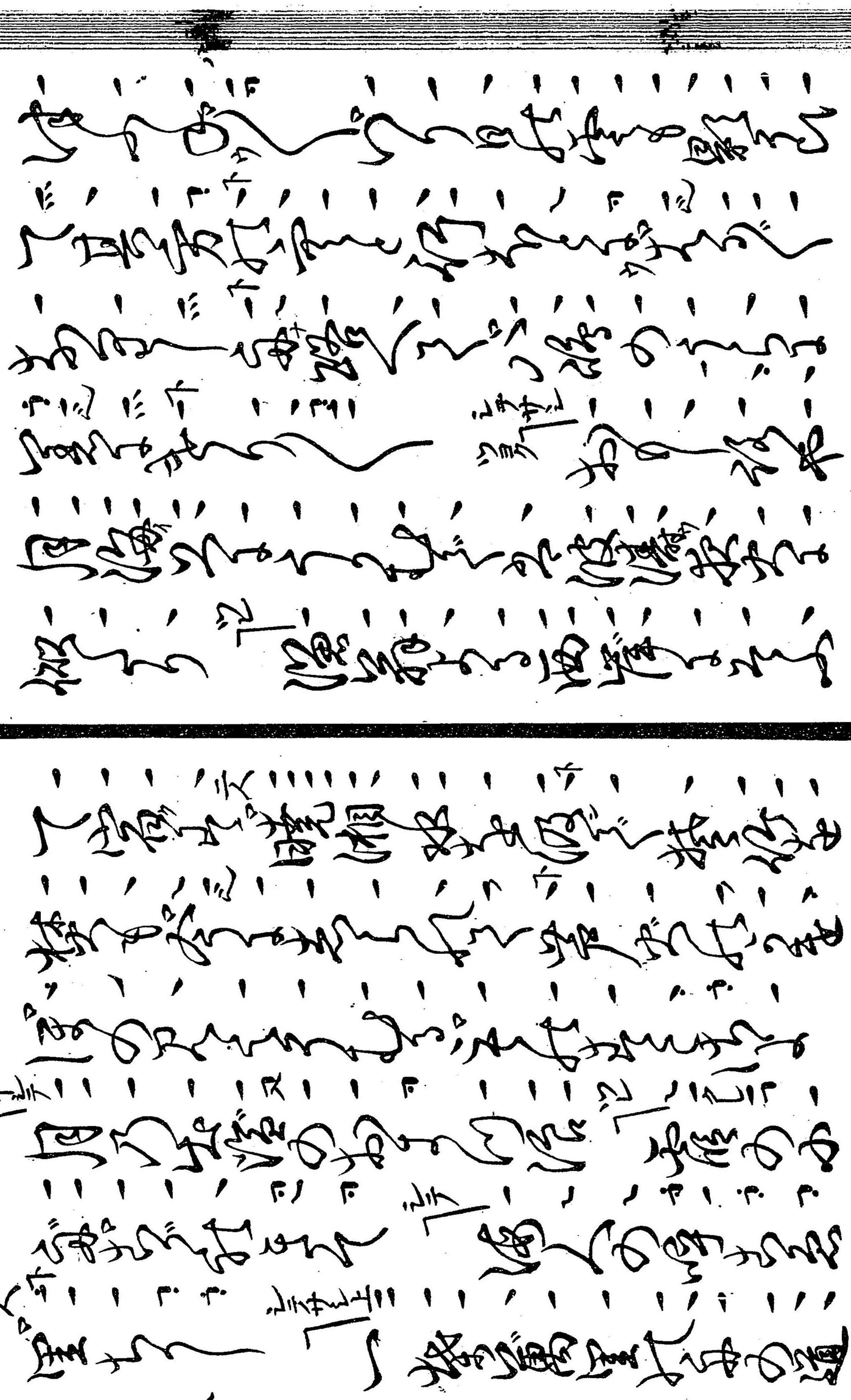
呉羽の手ぐりいと　我とられ
あやなく　ふる林乃あし　わとを
きりはたりちやう　きりはる
すちやうちやう〳〵と　悪魔も恐
ろゝ巷あまきやきる　わり姫の
けし乃袖　思ひせすり残ぬれ

ぢくだまくはつる指人のゆめ
乃精霊妙童呉羽も影向な
すりあもせがらよるゝ恐ろ
宝は積を残して我思る
さけその御代乃めぐみ　二人
はおり姫呉羽あやはとりかゝり

ざりふりくれ行あめ風さそはれきりぐく
世乃人はまことのあらすれ法代社
めぐくたけ猶

八嶋

月も南乃海原や八嶋乃
浦をたづねん是ハ都方より
出たる僧にて候我いまだ四國を見ず候
ほどに此度思ひ立西國行脚と志
ぢしは春霞うきたつ浪乃おきつ



唄 一帆の風にゆらるゝ 夕越の
空は雲乃波間はれゆくみち満て
ゆすられふ松ぶの陰からみどれ
うたろうて海岸ことも出る
ぬれいの秋景れうみよやはてしなく
らめる 宮居八幡乃うらづたひ

番れかみなみ名も数られ 鉛れは
と風も波乃よくく霞すらり
て伴ふくやあ風乃小船のほれ
ぐれ刀ろて那る夕暮る風
追も長く帰るまでや 心も残して
らんく
キザミ
擂座のよそれゆりて

此家に宿をからばやと思ひ候
日も暮候へばあん内申さん
シテ 誰にて渡り候ぞ　ワキ 諸国一見の
僧にて候が一夜の宿を借り申し候　シテ 暫
待ち候へあるじに其由申し候べし
みらしば候由一見の僧達一夜乃
お宿を御申候　シテ 餘りに見苦敷候
程にお宿は叶ひ候まじき由申しく
ヒ 暮れて候へばお宿は叶ひ候まじく候ぞ
餘りに見苦しく候程に叶ひ候まじ
候　ワキ いや〳〵見苦しさは
苦しからず候はゞ是非叶ふ事乃

出て、浦好めく一見れば事ふ
てらこの日は暮てゆくべき事ふ一ヲ存ぜ
童子こたへ申く 心わ申ばかり今
はよく申て山面ばかりの都乃
人ゝこたへこの日は暮てゆくべきら
ふ一ヲ存ぜ 一ヲ この指ゞ

都のゝ人ゝ仰かん さんば 三月三日
一、一、一、一、一、一、一、一、
ゆくはよきよりうゑばちらのゞお
一、一、一、一、一、一、一、一、
宿をの申さん 昔こそ 昔
一、一、一、一、一、一、一、一、
みうもあの屋はれ 唯筆執ら
申めを 上 昔ゝ 一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、
きゝ 三月 墨もや やらあきれおの

上三人

紙月かすみ立てくれ
ぬ　八重の雲高まりの
とは　八重の雲
苔むす石の痛しや　ヨウ　ねゝ
あぐたる浦のたれ　ウ　むま
みるゆたかぬ　ヤ　ヨウ　ぬ
雲井ゆらばん　揺　のた

卿も都を離れ　ヤ　我
ゆくとは遊　揺　むべ
きりく　問
いつの事ぬ
あらん似合ぬ　ヤ　ヨウ　ぬ
ぬ　一つ世所を　ヤ　ヨウ　ぬ
我のもとを　ヤ　ヨウ　ぬ

語つゝ涙にむせびく　〔詞〕あはれなるかな
乃ちかくりしはなし申べし
ぞく其比ハ元暦元年三月
十八日の事なりしに平家ハ海
のおもて一町斗る船を浮べ
源氏かたは陸にひかへ大将

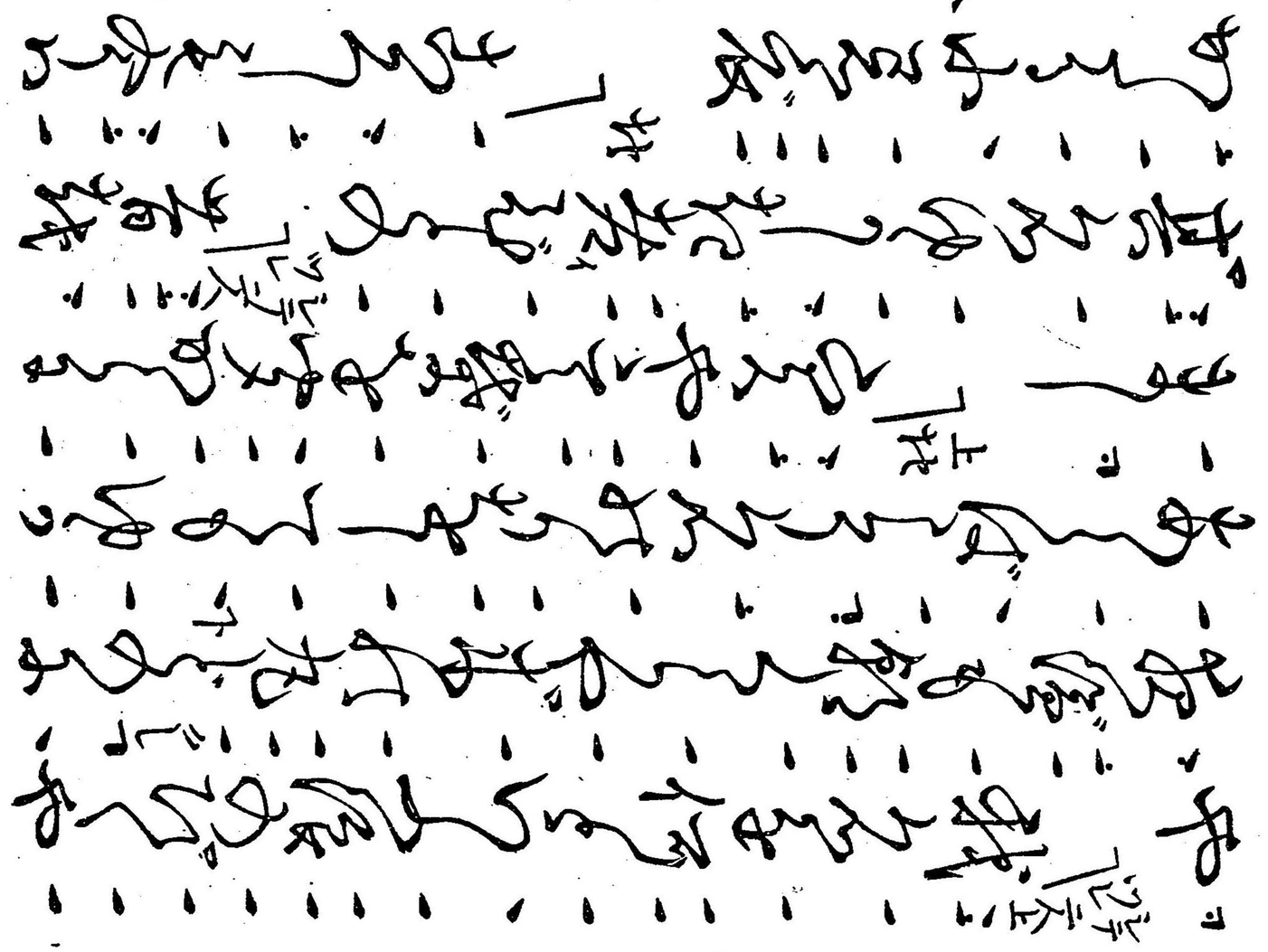
軍の旗おもてには赤地の錦のよ
乃直垂に紫裾濃乃御着背
鐙ふんばりくらかさにつゝたち
あがり院の御使源氏の大夫検
非違使五位乃尉源乃義経
と名乗り給ひてそのかつぱれ

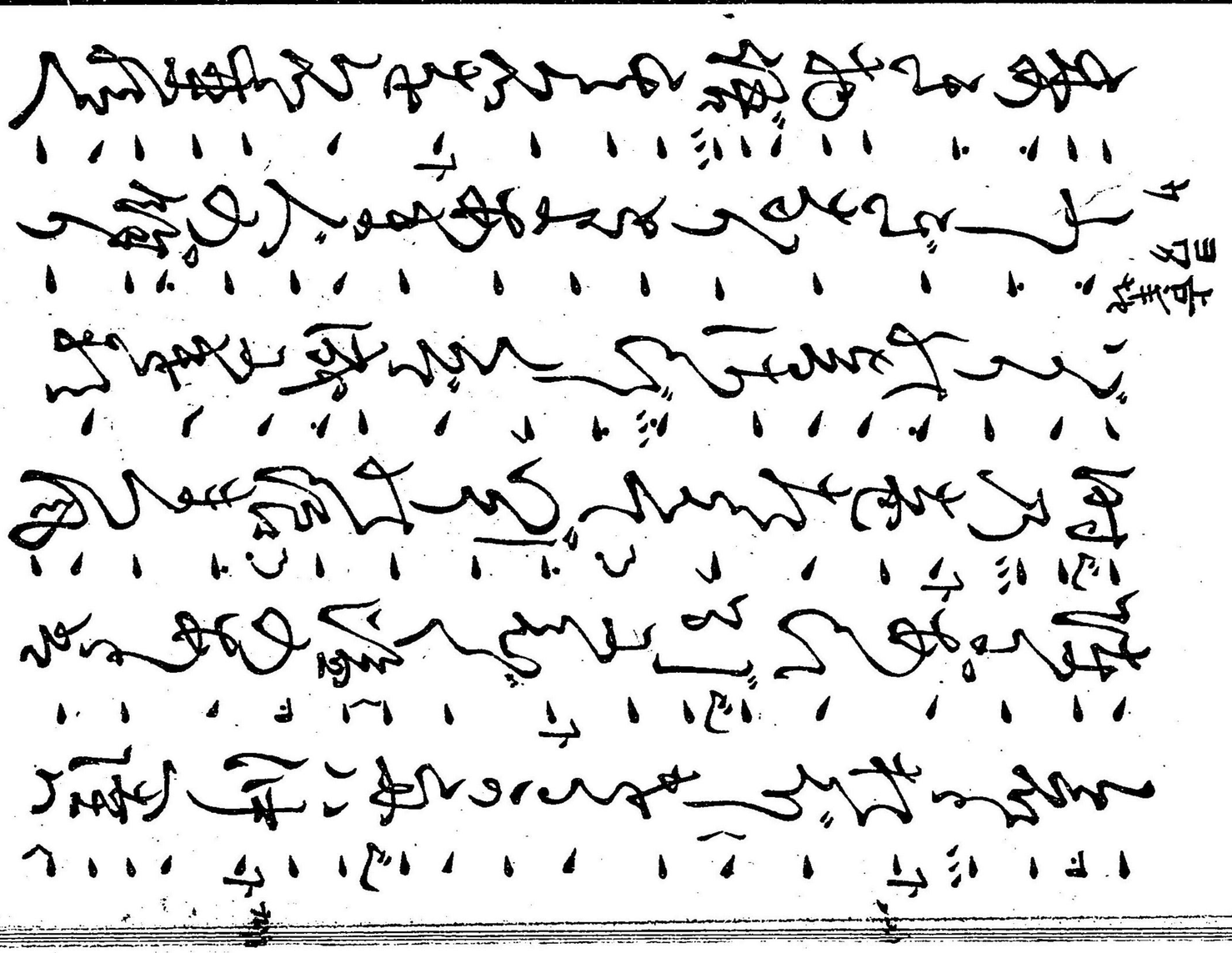
たねやとかくし今は猶思ひ
出られては　平家のうる
よりも言葉をかはし語らば
船の漕よせて沼をちぎるは
わりきりて陸の歌を侍をしよ
源氏は方にぞ清く五十騎

ばかり中も三ほの屋は四郎と
名のりて近づき刀さし
寄る　平家は方々も西七
兵衛景清と名をなのりほのや
きしめぐり義ありよ　彼三種
はやり武者ぞ太刀ぬきて力

力なく少し汀に引退きしに
景清追懸三保の谷が着たる
甲のしころをつかんで後へ
引けば三保の谷も身をのがれんと
前へ引く互にえいやと
引力に鉢付の

板より引ちぎつて左右へくわつと
とぞのきにける是を御覧じて
判官御馬を汀に打よせ給へば
佐藤継信能登殿の矢さきに
かゝつて馬より下にどうと落つれば
船には菊王も討たれければ





ワキ・ツレ二人

まだ夜乃うちほのみゆる暁
あかば去ゆかればちかづくべし驚
はそごまねかやあのしく継あの
らぼゝも名のる兵義経の浮
世の夢ぞ覚し旅よかよく

地

ふぼるや今ぞ此ぞじゅくのぞゝるな

尋ねし答るも義経の世の夢
ぢゝろは深きでまでと中々はる
称もしらゝ風ゆく松が枝
まくらぞげずて思ね夜半める
岩むしろ置て夢も結みるら
く

後シテ上

落ち行くかなで破

鏡にてび照さびぬ玉ぞ
なれの玉にて見神魂魂
乃境界をうつり我と汝身をる
しめて海羅のちゑにより
こゝ波の海うつばらに葉面
の影にふぐ早暁に
海や笑と思ふ宝性より甲
冑を学しみて別宮に
ゆふ[ニテハ]わきよつねの
雲にかくれ嘻嘉を
て於西海の浪にてびて
ふ所論をり[ヲキカン]思ふ心うちう

はるかの海ともへゆきたかわれは月の

シテ「まされば夜なおまで墨なれは心もせめ

る今雪は友 ワキ「昔は今まされ

とりて シテ「母と俊との合戦の女ち

ワキ「あのらかて シテ「見れこゑ 武士

わば鳩よみるや。月ならめく 〳〵乃

男なくらぬきつみら筭の道八迷

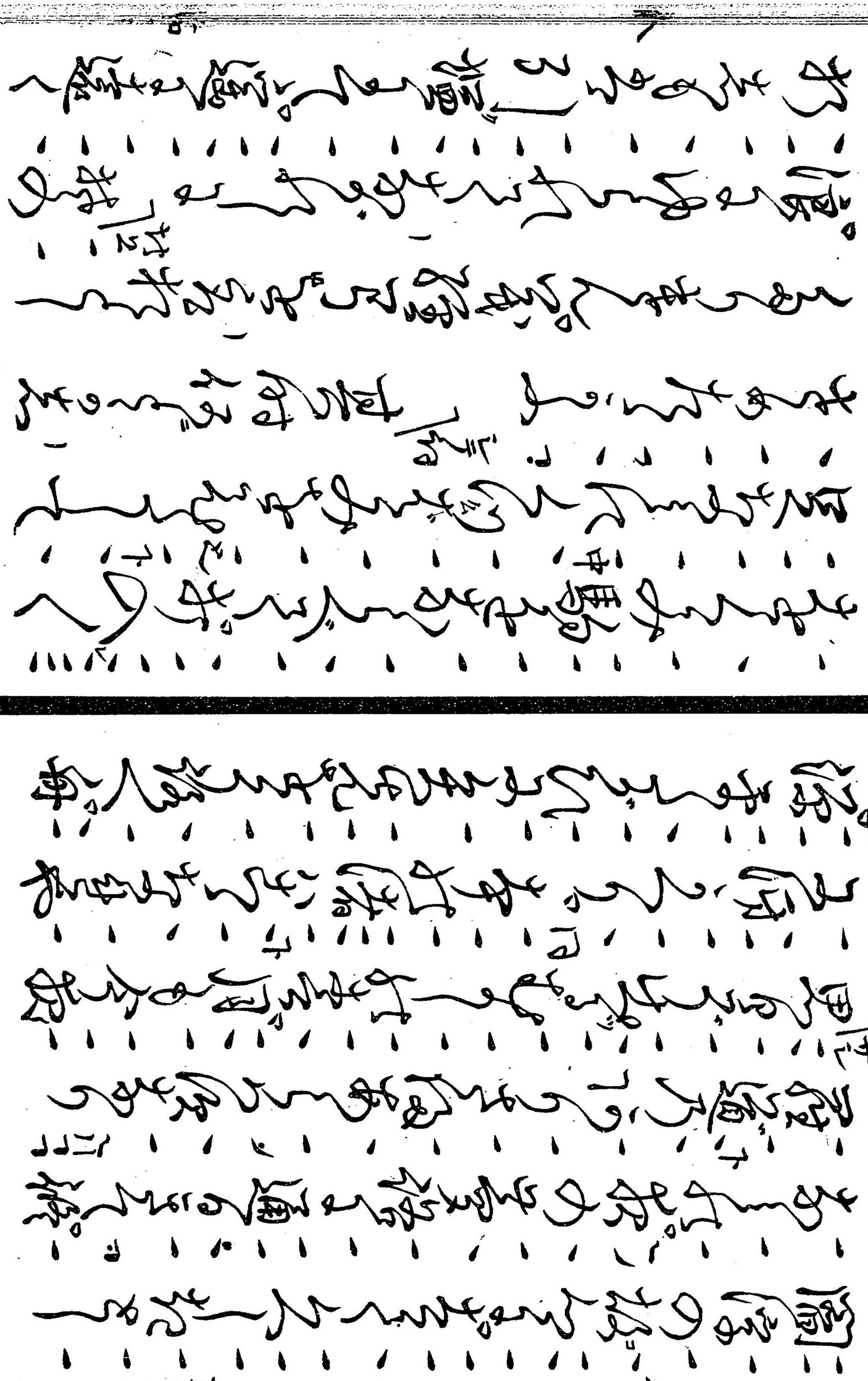
まぬがれまひきるぞやすかたの

海山をかけてなやまされて八鳴

乃うとめしやどるかくれ執心乃

ばりかうの深きおまの拘蓮

申あり〳〵 見まさぬこもれを



流れゆくを 「上ヲ 敵(テキ)に弓をとられ

じと駒を浪間におよがせて敵(テキ)船

ちかくなりし 「上 ほどに敵は是を

見しよりも船をよせ熊手にかけて

既にあやうく見え給ひしに 「上ヲ

されども終に弓を取り返し渚に

うちあがり給ひし 其時は浪打ぎはに

「下 其時兼房申やう口惜の御ふる

まひやな渡邊にて景時が申

しもこれにてこそ候へたとひ千金

をのべたる御弓なりとも御命

には争か替へさせ給ふべき

淵にかゝれバ判官早足を失し
召りやとよ弓持をむかなるば
義経鐙深手より弓箭をひろふ
わらはしかし弓も惜名は
いふぶちのバからばされバ惜ら
きを敵にとられなばやの恥也

かゝれんなお世念の障なる
西つよしうれ故に討れんなるよろ
ありし義経が寧れ拾ぞと思ふべし
ざらば弓を敵にわたしとて給ふ
それまで弓枕のかねまで末代にあ
らばてこそ悟り難くが当するて

ゑ[illegible]ば人まで皆感涙を流
し、きり[上シテ]智者ばかりは
勇猛ゑ[illegible]ば[illegible]
乃掙弓敵よわつて[illegible]
ばやむ[illegible]の[illegible]
命をのがれ[illegible]と捨て社[illegible]

つゐ[illegible]
みな佳名をぞむで弓筆は[illegible]
なるべ[illegible]れ[シテ上]まゐ[illegible]羅道の時
乃声[地上]ゑさきびおとさんざう
きり[シテ上]きりの[illegible]の敵を
たゞ[illegible]ゑ[illegible]
しやまゐは[illegible]ぬ[illegible]

檀乃ゝ紙の　其上の軍令
たちやぶる　岡辺の浦よりひきあの
海山一面よりの雲　震動して敵より
あの時の色　懸れば波乃ゝて
月ふたゝび　敵れたり
ゝ　ほうよりの敵は　ひかれた

煙れる影　水やそらゆくも
まゝ雲の泥乃ゝ　合さちぶ
る　敵軍ひきもしさりたるむ
かもゝ　船よりの波より吹て
敵ゝ乃ゝ　海風ふきて時
乃声ゝ　ハ浦風ふきて

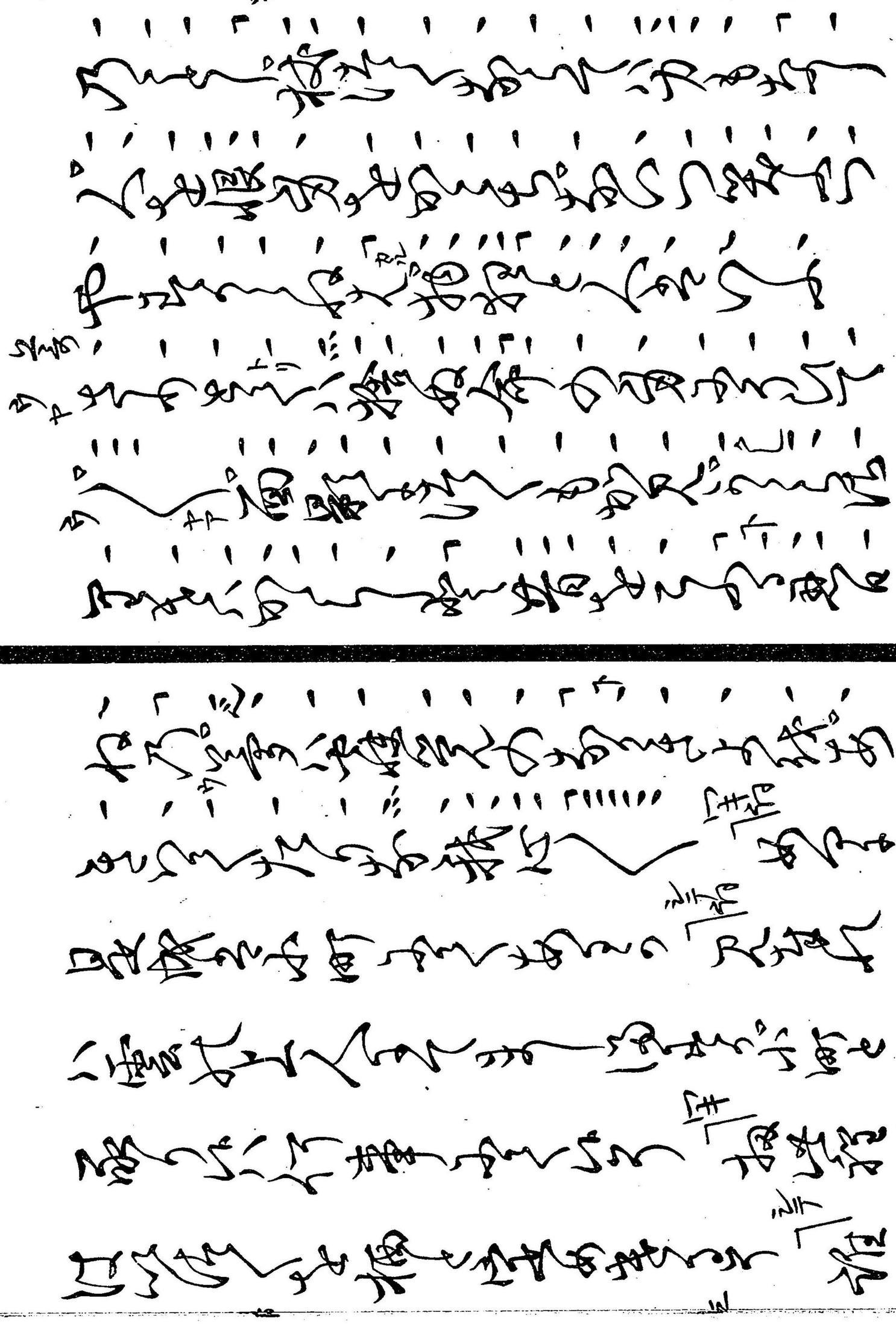
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

鶴鶏小町

是ハ陽成院ゟ仕へまゐらせ新大納言
行家ゟ[illegible]ねも我君敷鴻の道ゟ
はじを思ふれば番しく[illegible]を掛きれ
[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
出羽国小野の良実う娘小野小町

これハならびなき哥の上手にて
候へども今ハ百年の姥と成て関寺辺
にあるよし聞召及ばれ御憐のあまり
を下されば某返哥を尋ねて
聞て参るべしとの宣旨にまかせ只今
関寺辺小野小町の方へと急候

あふさかや関より秋の誰か住む松坂や
四の宮河原よつ乃辻にまよふ
乃やちまたにまよふ身の　首にて老の営
れ花やかなりし身なれども今ハ繁
義の世を待とて類ひなきハせめてもの
ゆかしくも人ごゝろへにそ凍解の露の

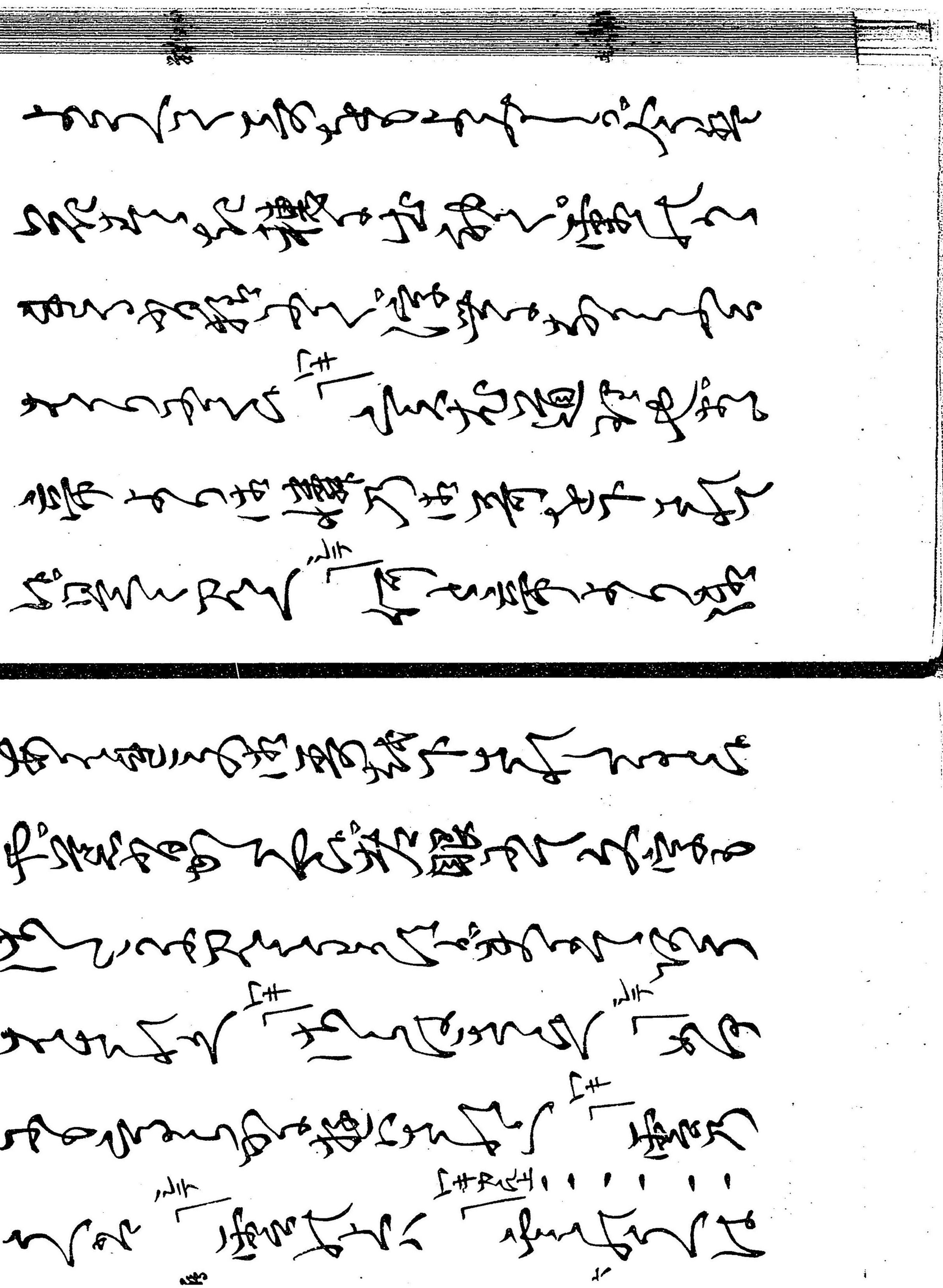


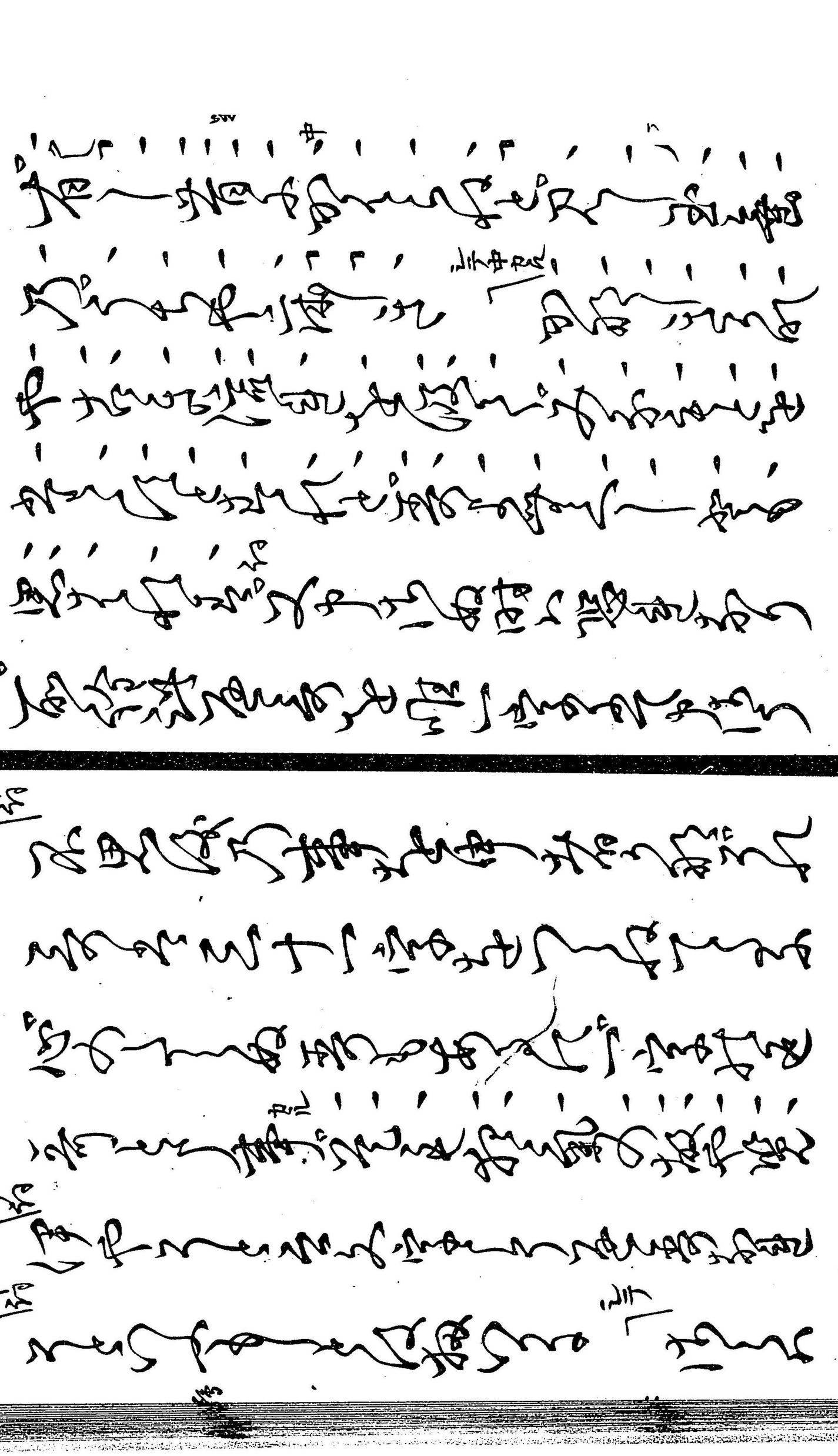
さむさとハおもへども唯閑寺過
に日数を送りけり 閑々閑寺を
出るに都を去りて関寺にハおも
しろき所也 前にハ牛馬も通
路まくし貴も賤もまゐる也
後にハ霊験の山高うして 嵐

をも道もあまく 雲霧 雲霧
立出て見れバみづうみの 波に楷
かゝる白雲と花とを見てもおも
志ろや松風も白ひ花はちり
くもれどもくるは志る雲井なる青
面白さきしたる舟水に出たる八湖

の志賀からさき乃一つ松ハ有れ
とも此程あ柏木東に見ゆるハ石山
やがて石山乃観世音を頼み奉りて
ハ猿人のつきせぬ命の千歳の秋
たのしみあるべし　かくて都乃跡
しのびし時ぞ殿上の交に忘らとむ

思ひのあまりハ何よりもなし
杉枝にすがり都路をたどり行き
てよそにもえぬ時ハ清の宴すなる
あらはずかしや小町が今の有さま
詩歌の　我ハ一首百家仙
洞のまじハりをなしし時ハさまざまの





帝は法華経を
ふ書かせたまひて
一日二夜
うゑ
むれのごとやゆゑさ
ようようや病ひきのまて
ごとくゆゑなき時は町う
よりあるを
ゆゑ
なりあるらん
上日
とうとうと
ゆゑは程なき事なり帝の法華を
ぞしまるまて
一日二夜
きもいるるんと和子はみるるん

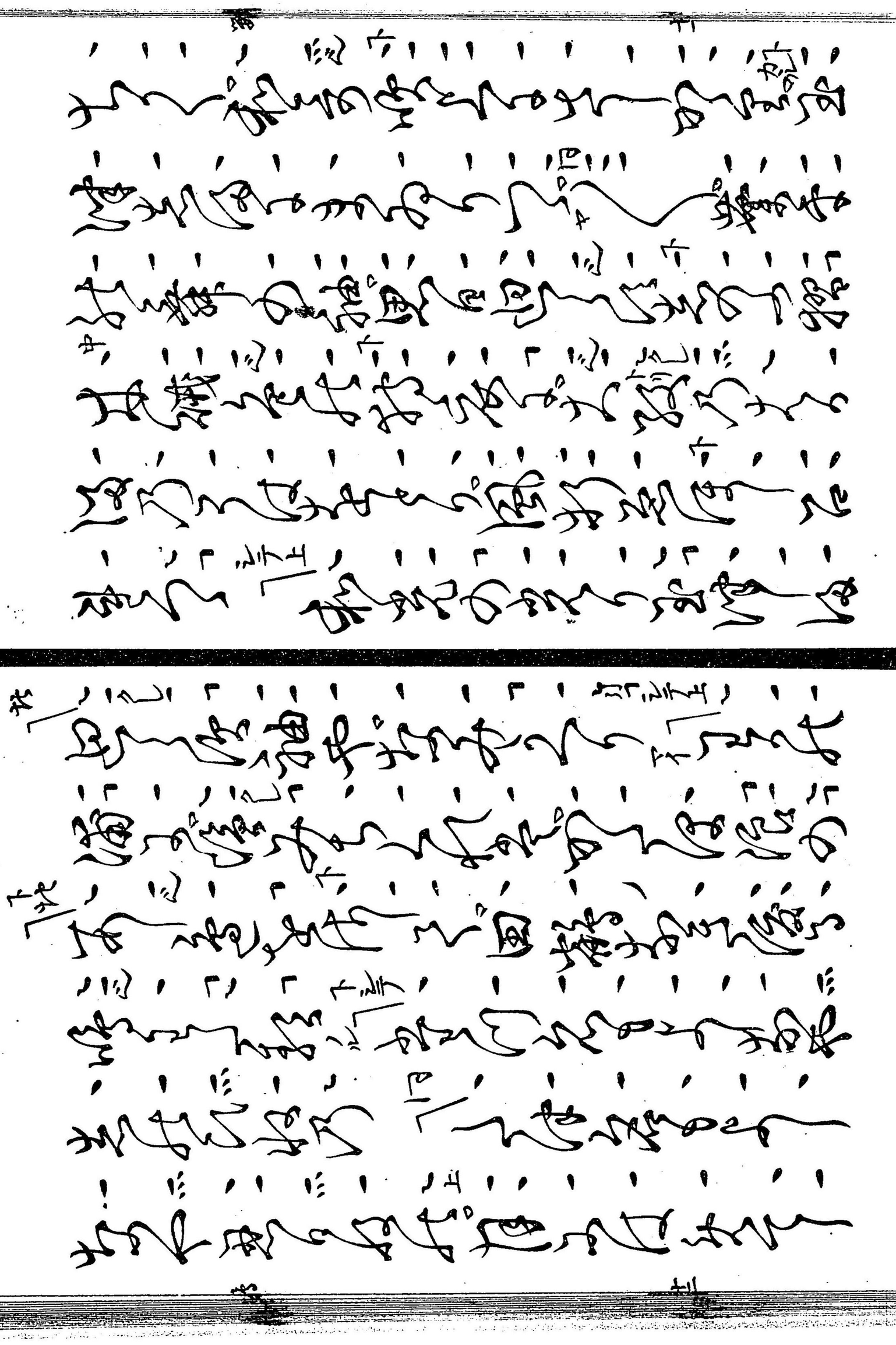
神もゆるし給ふ
こゝにて高位まします事
ゆゑとゝ和尚仰せられ
けゝ
七人高僧さぬき寺
絶奇旋頭歌作り俳諧連句
鶏鶏をもつて
作り
鶏鶏をもつて
作り
ゆゑとゝすゞ唐土
唐土の鳥ゆゑ
もつて人乃ゆゑ
てゞかもめの
以ゆゑとゝたゞ
其ゆゑとして

なかればおしむ人もありとは申あり
宮や寺のみちの路にてつきかあく
乃名も思ひ侍るものはなげきまて
さりながらみよの集はよろづ乃
ず其多くある中に今の小町を
如何なる名のるをねて哥乃様く

まさるなるとて明よわくとむと
ことさら家のみ伝ゆる書き直
猶つりし和哥あたる義を持
しみもの小まきての歌なきぞて
ちぎりのみゆめしまぬくはなみの
承ありら実への切りちも安き

されば金屋の花と作られ桃李の
面影あひし柳髪風にまかせし風情の
ありし業平なほうちまより
齢かさなりて今は雅の
とおちまではやんではひ出ゆけり
さるは小町がなりきる　いつる

小町が業平玉津島にて法楽の
舞をまなびく　法楽ハまなびて
法月の影すでにも業平玉津島
にまゐり給ひしを聞きつつ我も同
じく其ともに都をはまたに舞
ためていちぢり山崎寶の名にし浦



「ゝ 「はそきは人乃
これまて乃 「、かほとの身
「老とおかゝとめもと
こまえりれ乃まゐ乃時人まゐらぬ
おひれとは老の 「覚束なし
はむかしやなかくて日も暮
ゆくゐふまけうとひく行

家ゝやうの帰りけされ 「小町
友今まて有りとそ見ゆる
すかりてよろ〳〵と立まき行に
袖ひちかへすもかき行 袖のおきもる
も笑ふる乃望み悟りのうち
まき里

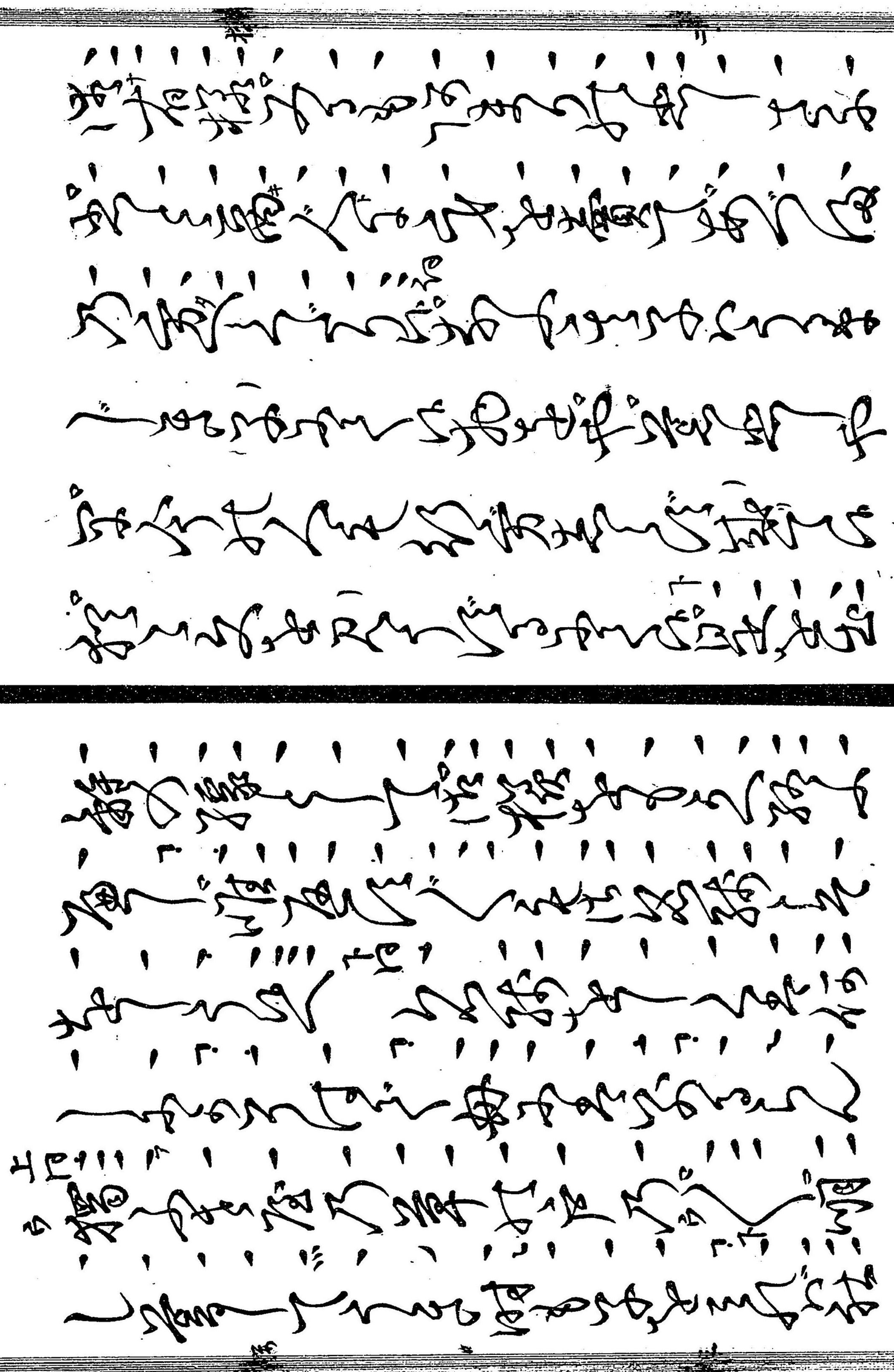
櫻川

男行

加賀の出者の事國方の人高人
多く作る我人數多ゆゑ
度々絹紙に目を羅て
昨日乃書狀を杉さの人と賣
百ッて彼人ゆゑ作ゑの姿と

当代をば桜乃こ傷の面みて
桜ぶれ面こ彩こ惜る雨きさ
仕舞ぶ只今桜ぶ乃毎れくく
と云ぶ詠あ詠こ詠みて分ぎて
ぜくく夢円ぶ中さ雨ぶ
ゑ夢円中ぶ桜ぶれくの後りか

シテ者
誰
男
けんど桜ゑれ
方ゑ詠こ乃ぶ詠代ぶ惜ゑ
雨ゑきと仕舞ゑ見ぶ詠ゑ系
雨ゑくぶ乃まくて惜ゑ雨中ゑく仕
者
雨見ゑ見ゑぶ中ゑ文ゑみゑ
ぶゑみて詠ゑ仕ゑ詠年月乃



慰むまぢりとておき我らのむ神
し
そもこれ花さくや姫のは氏子なる
抱き桜子とめでおきびし移へやすらぬ
まづはれ便りくれたる故郷の今ハ
何の御嫌をも頼むべき身の
なれば我が子は行くへ尋ねんと

消えてとけ迷ひ出でもつくし
えてある桜が里の山路の果てよい
とぞん 日本八常陸國いそべ寺乃
住僧にて候又是に渡り候おさなき
人を我等が弟子たるべく思ひ僧を頼む
よし仰せ候ふ程に師弟の契約をなし

中てゝ詠あらうよ桜川とて昔の
名前のゝ今を盛乃由中に稍ふかき
なきを人を伸ばしてゝ桜川てと
高ハ山くゝ峰ハ雲の中乃なの
花盛〳〵雲の林に陰さぎなる
みどりなる中をうつるや雲れ

ニテ
侵苔ル
見ク
めつらあきなる道行人桜川へ
昔の影かゝちりかゝりを
やゝ雨れ雲れ
あきなる水乃なかれを

流れん花ちれる水乃まにく
とめくれど山ハまさなく盛
みちり咲く時ハさら なりさくも
やさらつ花よやくとくやされ
色や桜花 さくら花ぞよし 風の
名はまよは 水おまよ命まよ涙ぞ

隅田川 思ひを深き花乃ゆき
ちるやと涙の川風ぞん 見ずや
あさる都鳥故郷は帰る日向
乃者ぞさそ思ひ子なさらすなひて思
ひそぞまよく心ぞよく海山越て筆
濃の海もちそて須磨の浦まで八

蹄はのおとたかく常陸とや近
づきぬ「實や歌子は道すがら
ぢねがなはさきさ揺さぜつのきん
「實はまろがみ流れきて桜川とて
ぢもかのなきらぬ不ありつ不き
し子れるも桜ぶがきべがり見ん

といひわらとひぴみなかつし
き桜川よ散らく花の雪と波
てぶ川うら空夜は春乃がみ
おきみす花もの三みの手流く
親と子わし初色もちづく
あぬさぐる節のおがぢるよ墨衣え

かずとひあつさも秋とさそれおもと
忘きをばめぐみらんぷうるや
志げりそうぷぞまづかりしてうつる花
ともぐてはすゞぐちなる袖を我それ
花をそあづさぬく　いそ
君が袖ぬれて風里は深く

住そそぞ　「花ハ邊の紅葉乃
こゝのふく你　「ろ身をそ何ゆゑ
かねて親孔とはよもするぞ　「つゆ
みなるてふかきぷそそうある
忘れがうえはみぞうろはつまで
離くゆえを八思ひゆみづれては

いをこの痛りやばつてをきぞこなは
こてをきたるこれ胡をはなはだ彩
いをををたるこれはつをきこ渇仏の
業をかたこ拾をてはをこいかを
たる事をきこ「女」はつをぐ我
故郷の法華をばをこ姫

と申て法華経を櫻ぶをこそ以
はをれぞこをを我をををを氏
ををををば櫻ぶとをこば我ぶこ
をば法華の法をこ仏をを姫ぐ
ぬるをこ乃名も櫻ぶをこぶを法
川をををこぐをををを

花のちりをはらひもせずとそよ
ふり「謂をきけばおもしろや
ぎゝは何づも縁そありきらば
うつゝなきまゝの熊野よりの末路の
桜川までめぐり来て縁よるべ
女「ちなむ桜川乃名にひかれて遠はるゝ

つきてみな名ある彼貫くるが
あはれめでゝ「実にむかしを思へば
ねまもろけさきなあの都より
女「末見るまでぬれむちる国に　甲「名も
さくら川　女「ありとおもへて　める
より来る都にはなれし桜川の如く

波乃花こそ咲まれくよりはとめと
清くれぬ花の雪も法ゆふ
ふる年の名残に袖の涙こそは
ぬれぬ先に居先をまぎれだに
うれ咲ぬ先ぐ波乃深へ
くく水の花定まりこそ
せる形くく

[illegible]

山ぶきのうて櫻川の花の
ゆく[illegible]形を事をいつる風
乃形なる花をさそふ[illegible]
流れ出ぬ[illegible]
[illegible]
実をみまぐ山ぶ風れぬの物

吟おもて　　たる形のみちを
白妙の　　流るとも形ばかり
よりちる　　櫻の　ゆきの
なごり　　花ぶき　深みの雲
乃　　河のぞみ　　ちれば流も櫻
川　　なる　　花をまくらん

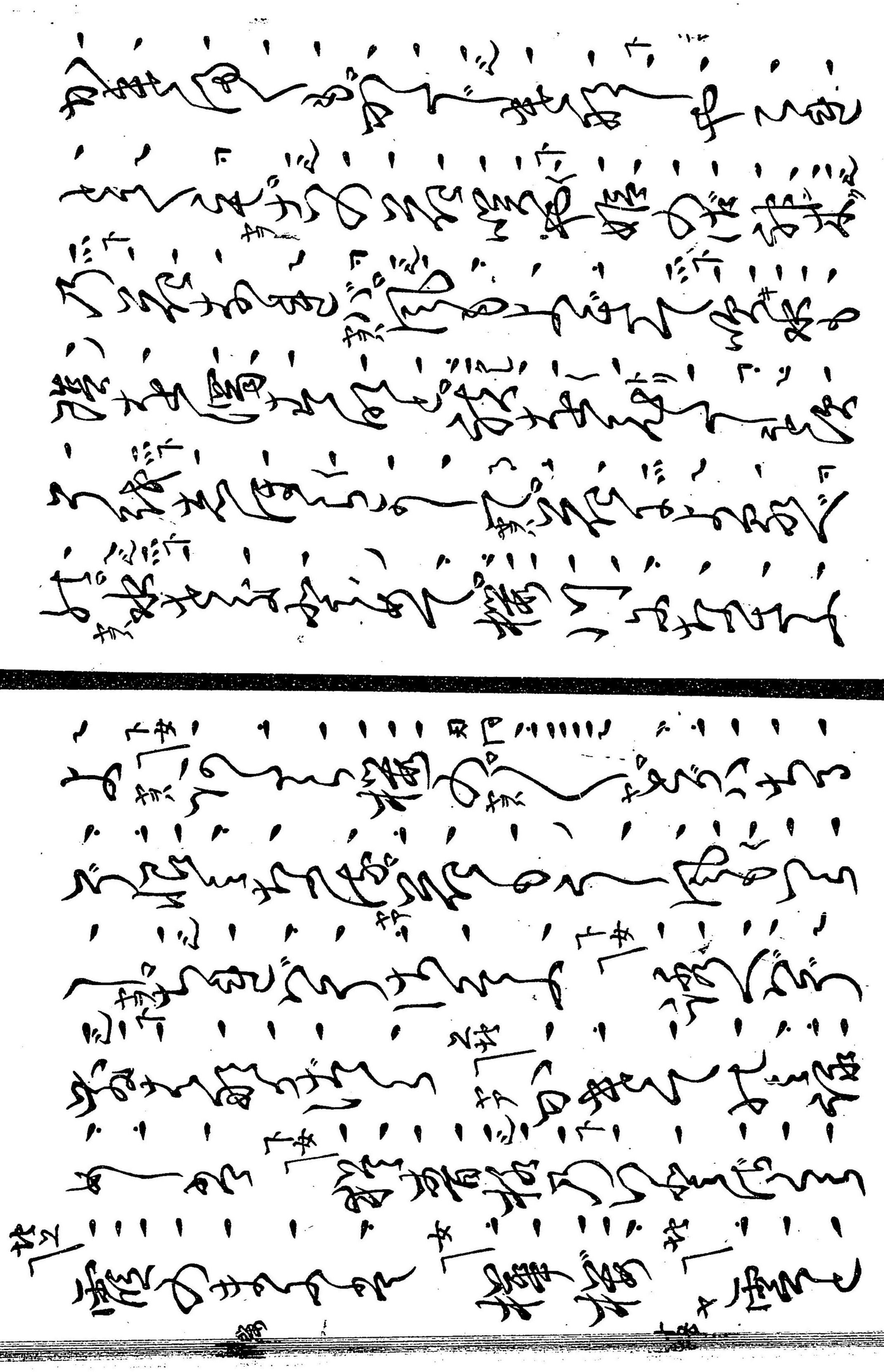
花の下にはらんとをもふ水の
雪ばらけなる　花乃軸　　をも
水流花おちく　　をもふ
あり　　風ふく風高して
鶯うぐひす　　岸花ふる水を
照　　洞樹孫　　風を含む山花

開く錦を似たり澗のそこにて
あるはどと　女　面白や思ひたぶる宴
みうかを集く明らかなるを
さくらの一枝乃濃一はの花ぶ
きぶく生るを面白ら有れば
はひなるば桜ぶは他ぶの

孫あくしう　実　宮やとしと思て
花のうどんとある水ぶうるはやや
雪ぶやいつ陸ちりぬまば
はあくふぶと思白ある
身をさていつぶ我も夢ちるを花
乃ぶとぶくぶされぶ指

よりはなさかりなる花なれや落
ても水の花とハ消えて浪の花よ
然ればなきしも今はちらぬ梅
乃ハ手折らでもちぎり花をなれ
春くあぢきなはだ枝のちるな
うらやまれぬる気の露にもしつゝ

こゝ落花を乱しめる心ありける
みてもかなみにちりてはるゞ花
思ひ出でし桜川の水の花を
花陰暮れかゝるちりかちる花を
桜なかげと水まさゆきかな
たえぐうき浪の花みなしづくゞ



女「三吉野乃みよし
野の山もみぢ葉やかつ
ちるらん
白妙乃雪も
さくらもぞ
波もみるべら
集めて
ども
我身ぬる
上ロンキ
ウめ
やうの
ぞ
ぞ
文
今

雛ともいさやきてぬひのぼりて
人ともの親よハ何れお為よとい
親よ　何さりゝ今りゆうりゝむてき
歌子か栗り打こそさゝぬけるお桜
子子は咲ぎよ　桜子あらく
女が宿りとみへもわうぶいつまとわり

子ちうゝらん　二年も日数ちらぬ
子てぱ心まも去まおや心う子乃
子とのうあいかうそれども　さ作り見
あれおりだくを　終ここれぞ
ちく種子乃世乃自だ世乃でい子
ありきり鶯乃あつ付こそ鳴ゐるこそ

嬉しき源なりけれ。かくてさしも名にし
立ち帰りく。母もたらけ揺らく
く。紹果の縁となりにけり。一世
安楽ならん法の親子のみちぞ
ありがたき

東岸居士

ワキ
是は遠国方の者にて候。我此程
は都に候うて所々を一見仕り
て候。又今日は清水寺へ参らばやと
存じ候。松なきは皆桜なる深き
て花盛なる嵐の森
ワキ
是なる

ゆかりなる古岸居士てうしたの
梅今日のいろかゝる聽聞の法華
ぐ　出てあらしきゆぐうの
聽ゆえいつたぐ萬ぐずの皆目前の
境界なきぐ柳さみどり花ハ紅
あら面白乃法体の氣ちやな

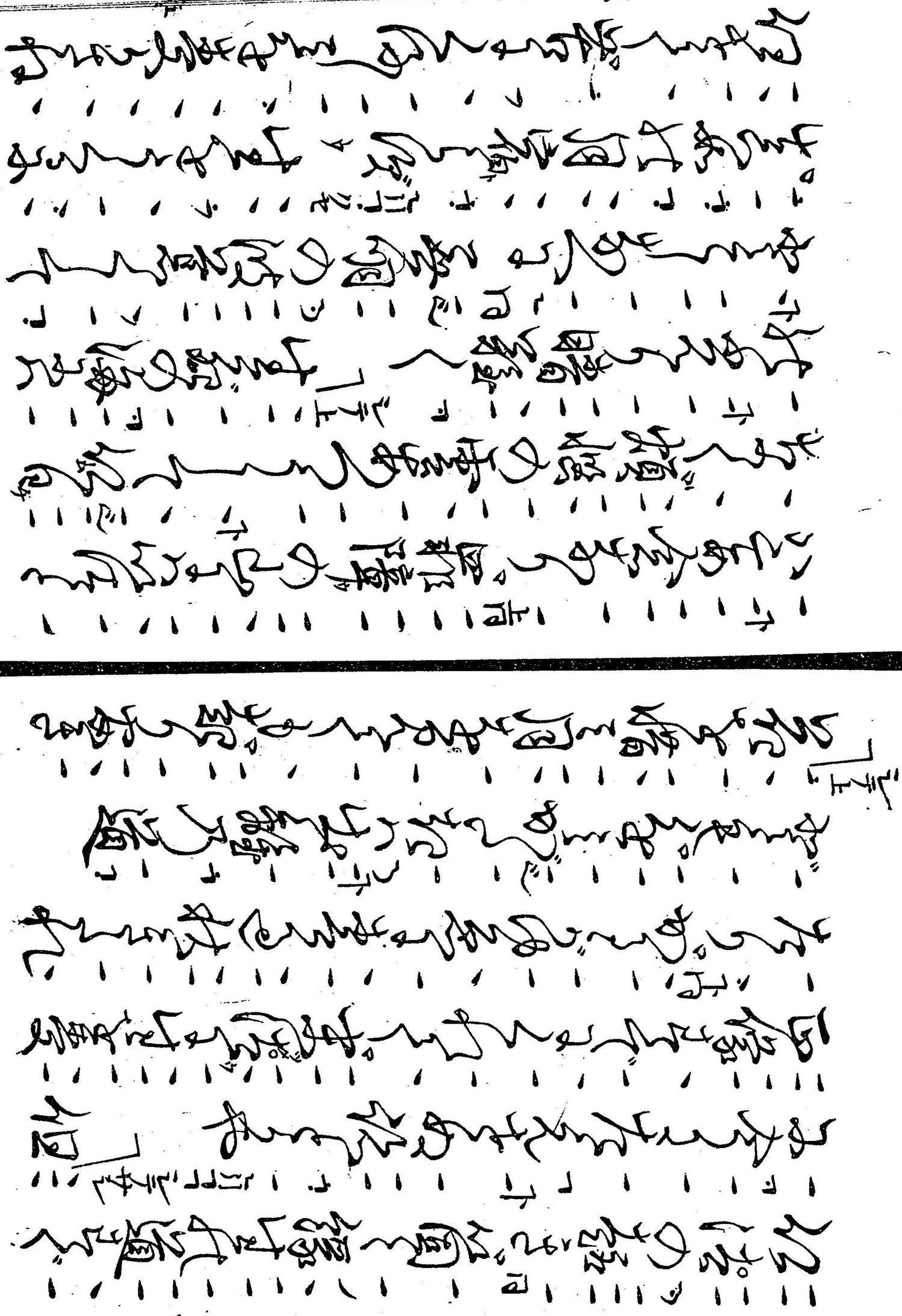
[キ行]
花面白其人ぐ梅洗橋きいの
ちる人乃ぬきを拾日まで柳みてぐで
[テテ]
花ぐ法ぐ自然法生の法界ぐ
孫の功力を拾ぐ孫日柳
なきぐ人ぐの拾ぐ花ぐ
[キカ]
佐ぐ東岸西岸居士の鄉里へ

いばくの方なる人のぞみとて形
をしば出家ぞ　むつかれ
事を為形の和尚身をしる所
をもかれば出家といつべき習
なり出家なりくれば繁をそ
らば長を墨をはなるぞだぐ

おのづから道を会　筆を
見ても　智をそ
くを　愚なるぞ　形をれ
なるを　白川は　かれる
なりは　みて　来乃　康澤
西澤の極乃　みはるく　礼を

[illegible]
やまもがの枝の枝の橋乃花ぞとる
[illegible]
法の一筋よりあらぬ道の橋なれ
[illegible]
ばをめぐる八法ぐ彼岸よりとり孫へ
や　[illegible]
[illegible]
きく　[illegible]
如ぐ禮儀形ばば福の法道ぞ

いるかをばいざやとらんと迎も
[illegible]
法の為に[illegible]
乃ぞ[illegible]
[illegible]
面白やとも胡蝶の変化ぞ
[illegible]
[illegible]
[illegible]



ぶよかへるかえるがいく窟よより
くらおほ難く云道のちまるみ
迷ひぬ祢そかくげまかの扉は
宿らぬ栖もあしげ苑の捗変
そば受とやいてたえ父らほとや
せんさまらあかりとらくんとすれば

雲とおぶり煙と消く後を於き
とらむ蒐くも物しおりとらんと
すきばら又因受の中おかるとまつ
て勝をうち視をうてかきばる云
事あし彼受之草の教へりおけ於
みはのぞねまだ其歎の名のほる

てごきごもの笠大の笠は狭ちまぎ
孫をとりもてるすはあ蓑の蓑のふら
はの乃ふは眼ちまば蓑の涙ふるる
ほきせ蓑蓑乃煙ちまば
孫をちめ涙ふるすあ乃ふるまぎ
ちを抜く 上ヘテ
ちを抜く 倫蓑邪婦ハ

ばーーーの

事る鞨皷さとうつ法乃きく

七

「ニテ詞 面白や折から風さへくもりて

浪の花ぞとちりかゝり 「三ヤカン 雨ぞ

ゑがく洛陽の春もちら／＼白

河乃 「ニテ詞 流れ越すや風のたち羅

「三ヤカン うち渡すゆくや橋乃上 「ニテ 男

女乃行来 「三ヤ 貴賤ども 「二上 袖

ちぎるゝかねて玉ぞぬ乃ざるらく

流るゝ浮波乃ざゝらに掛けて底

まで 「ニテ 百千とり 「ニテ上 百千鳥

啼くるまはぞのゆふべ 「下地 はるゝ夜

されども我ぞ乃ゆく 「下ニテ上 行の白

川 「下地 行方志らぬ川の瀬まで

むかひハ東岸 さのゝ里
西岸 はるかみハ さく羅
うけあへは 法ぞれん いづ里
もゝぢまも極楽乃歌舞ハ菩
薩の法法とはきこハ志ゞ花揺
ぐよあきひへよあらおもころや

あゝ南無三寶ーうきすお数をを
錦繍もふきんひちゝさ緑管ゝも
み極楽の菩薩乃けゝひと変
えめをよ 何となく あやうくて
雲や吉ほうとゝ御法らん萬
法皆 てぬあおる宝采乃かざふ

良

九段

249

寛政十一年三月初版
明治二十六年七月改訂三版
明治四十三年六月增訂五版
明治四十四年五月廿八日增訂六版印刷
明治四十四年六月一日發行

嘉永六年五月再版
明治三十五年八月改訂四版

著作權所有

故

著作者　寶生太夫
東京市深川區吉永町七番地

相續者　寶生九郎

編輯者　東京市日本橋區通四丁目八番地
江島伊兵衛

發行兼印刷者　東京市日本橋區通四丁目八番地
椀屋謠曲書肆

發行所